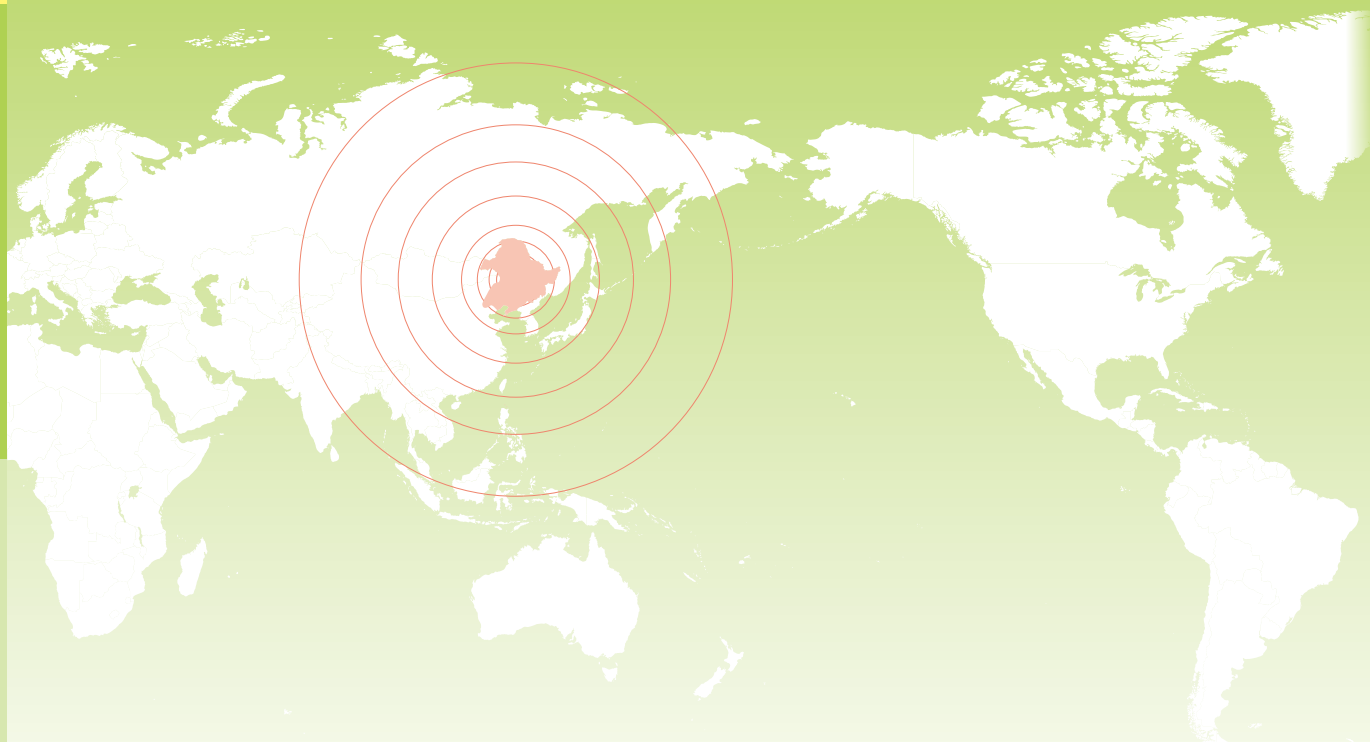
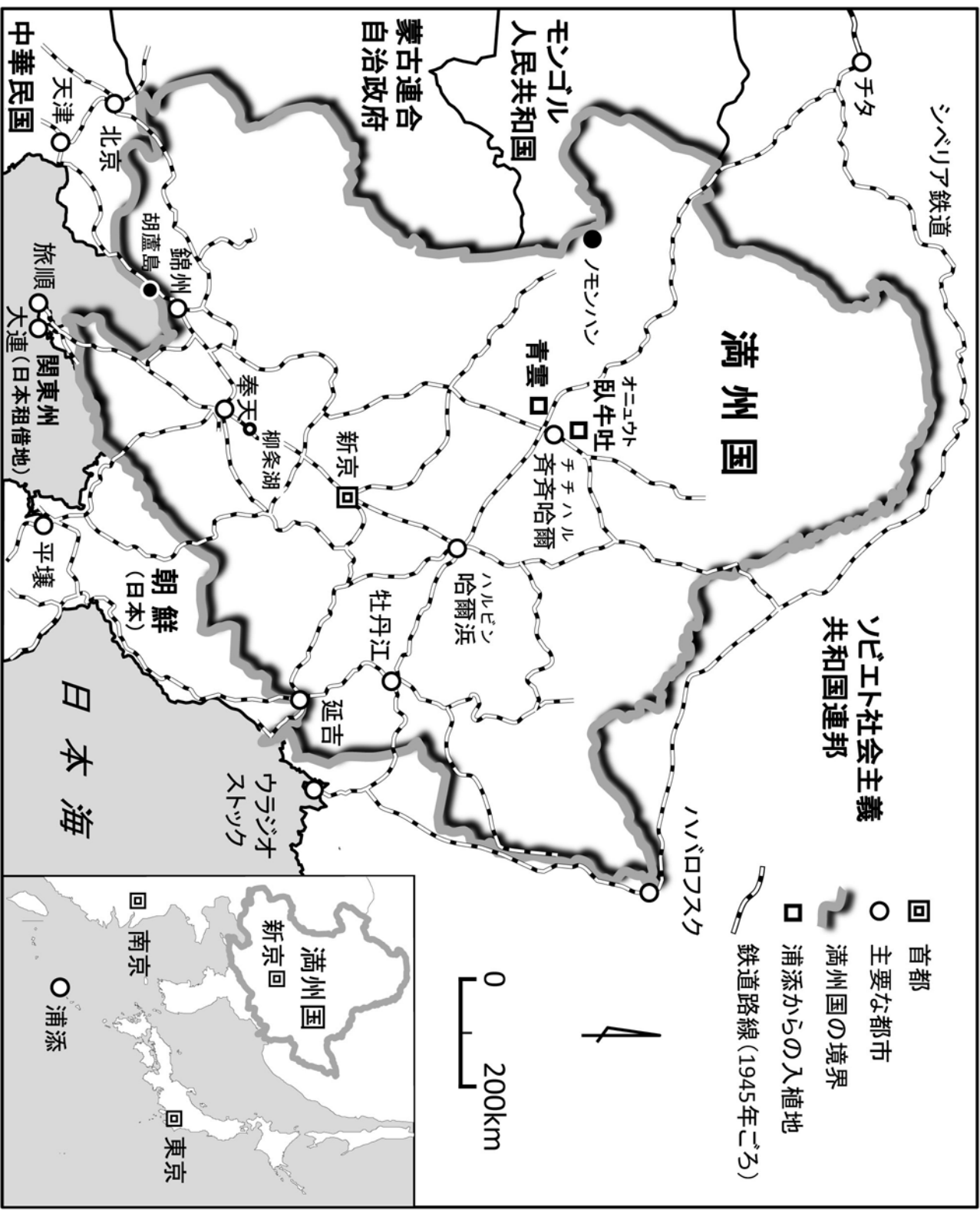


満
州

MANCHURIA

満州国は 1931（昭和 6）年に起こった満州事変の翌 1932（昭和 7）年に中国東北部に建国された。第二次世界大戦末期、浦添村・真壁村・知念村の三村で現在の黒竜江省竜江県に入植する「青雲開拓団」が結成された。この開拓団の浦添出身者には西原・宮城・沢岬・仲西の人が多かった。1942（昭和 17）年に先遣隊を送り、翌年から本格的な入植が開始された。満州の肥沃で広大な農地でトウモロコシや小麦などを生産していた。しかし、1945（昭和 20）年のソ連軍の侵攻によって開拓地を追われ、逃避行の途中や避難した収容先での流行病や栄養失調により、多くの人々が亡くなった。

ハ
ワ
イ
・
北
米南
米ア
ジ
ア
太
平
洋国
内



満州に一人残されて

宮里静江（旧姓比嘉）

名古屋生まれ

昭和六年八月十五日

私を知っている分は、残せるものは子や孫に残したいと思ってお話します。

父は比嘉三郎（明治二七年生）、母は千代（明治四〇年生）といいます。父は浦添の西原出身、母は首里の出身です。きょうだいは異母兄姉が二人、義姉は沖縄の祖父母のもとで暮らし、義兄は私と一緒に名古屋で育ちました。

父は十九歳のときに単身名古屋に行き、紡績工場で出稼ぎしていました。母も紡績にいたのでそこで知り合ったのだと思います。私が育ったのは名古屋市南区で、一軒家に住んでいました。幼稚園まで名古屋に住んで、一年生から四年生まで大阪の加島国民学校に通いました。大阪に行ったのは父の仕事の都合です。ちょうど戦争が始まった頃で景気がよかったですね。軍需工場ですりの目立て工をしていて、小学校四年生の途中で再び名古屋に戻りました。

大阪には沖縄の人がたくさんいましたが、日雇いが多くて橋の下のバラック建に住んでいる方たちもいました。そしてその頃は「琉球人」って言って差別されてましたね。私は子どもの頃は負けず嫌いでね。正義の味方よ。誰かいじめられていたら走って行ってね、

「琉球人が何したか」って。琉球って言葉が嫌いでしたよ。琉球人って言葉は子どもたちが普通に言ってたんですよ。「琉球人は犬も食べる」ってね。本土の方たちと暮らしが全然違っていたってことなんでしょうね。親も共通語使えないでしょう。

一度、父親に連れられて岡島という所に行ったことがあるんですが、そこに沖縄の人が集まっていた、沖縄の芝居があったんですよ。道を歩いていたら沖縄の方言が聞こえてね。沖縄に来たみたいな感じでしたよ。父は「沖縄を思い出す」って言っていました。

四年生のとき、大阪から名古屋に戻ってきたのですが、つい大阪弁が口をついたことがあってね。そのとき、まわりの友達が笑うんですよ。先生に当てられて教科書を読んだときには、その先生も私の訛りを笑ってね。それで私は、かばんもそのまま、教科書もそのまま学校を飛び出して、家に帰って泣いたんです。それを見た母が、仕事から帰ってきた父を責めたんですよ。「今日はここ、明日はあっち。子どももあちこち行かされて」って。父は「食べるためだから仕方ない」と言って夫婦喧嘩が始まって。今考えたら当たり前ですよ。ね。食べないと生きていけないから。でも、親が喧嘩するのを見るのはとてもつらくてね。それを見て、私は絶対泣いて家には帰らないって決めたんです。そんなことの積み重ねで私は強くなったんです。

学校が終わると、隣近所の年の近い女の子たちと遊びました。母は専業主婦でしたので、家の手伝いすることは特にありませんでした。私は子どもが好きだったので、よその子の面倒をみたり、友達

とおはじきや縄跳び、ケンケンパーなんかしたりしました。向こうの友達から、誕生日会に招待されたこともありましたが、プレゼントを買って行ったのか覚えていません。沖縄の人は貧乏でしたので、私はやつてもらったことはありません。

それから、一番不思議だったのはひな祭りです。近所の子から招待されたのですが、ひな人形を見て驚きました。見たこともないので「すごい」って憧れましたよ。夏祭りには浴衣を着て遊びに行ったこともありました。運動会とか学芸会もありましたね。五、六年になると、強制で親の着物をほどこいて作り直したモンペを着けるようになりました。

戦前の浦添村役場に、父の弟にあたる四男の比嘉通吉さんが働いていて、通吉おじさんが名古屋まで父を勧誘に来ていたんです。九月ぐらいでしたかね。役場で渡満希望者を募集する係にあたっていたようで、一人でも多く集めたいからって。ちょうど女学校の受験準備をしているときだったのでよく覚えています。女学校は憧れで、私は「行きたくない」と泣いたし、母も教育には熱心で満州に行くのは反対でした。学校の先生にも「何で行くの？もう少し考えたら？」って言われましたし、父も周囲の友達が止めたようなんです。父が「行く」と言うからね。父は、私の義兄を戦争に行かせたくなくて、家族で満州へ行こうと考えたのかもしれない。また、畑も土地ももらえることもあったのかもしれない。通吉おじさんは手続きのために二回名古屋に来ていました。結局、満州に行くため女学校に入る準備をやめたのですが、戦争が激しくなりいつまで経っても満

州に行く見通しが立たず、母が焦って高等国民学校の入学手続きをしました。

昭和十九年、ちょうど中学に入った年の六月に両親と私の三人で満州に行きました。通吉おじさんは私たちより半年先に満州へ行っています。義兄はちょうど徴兵検査があったので「終わってからおいで」ということで残っていましたが、戦争で釜山と下関の連絡船が通らなくなつて義兄とはそれきりになり、戦後東京で亡くなりました。

満州には名古屋から下関まで汽車で行き、下関から連絡船に乗って釜山に降りて、列車でチチハルに行き、そこから馬車で青雲開拓団まで行きました。

最初に開拓団に行ったときは本部に集まり、そこから私たちは興隆堡コウリュウホに行きました。向こうではあちらの方が住んでいた家に住んでいました。もともと地元の人に住んでいた所を追い払うっていうか、言葉が悪いのですが強制で少しのお金で買い取ったんだと思います。畑は興隆堡の人たち共同で使用し、四、五年したら個人に割るというやり方でした。一回はトウモロコシを収穫しています。

私は着いた年の九月から学校に通いました。ここは生徒が少ないので、複式学級で中学生も六年生と一緒に授業をしました。学校は本部の所にあつて、通学時には「たまに狼が出るから」と言うことで、赤い布を振って、今という集団登校みたいな形で小さい子を守りながら農道を三キロ歩きました。朝は日本と同じ時間ぐらいから始まったと思いますが、あまり記憶にないですね。学校は一日あったので、

弁当を持って行きました。

校舎の床は土で、地面もでこぼこしていて学校といえるようなものではなかったですね。勉強したこともあまり覚えていません。先生は島袋先生という方で、戦後浦添の人と結婚して、浦添に住んでいたので会いに行ったことがあります。

満州に行つて、一年は静かでした。戦争の気配もなくて。だってへき地でしょう。新聞はない、ラジオはない。情報が全く入ってなくて、平和そのものでした。

食べ物は沖縄よりあったと思います。なぜなら「こっちはクワツチーの国ドー」って沖縄から来た人たちがいつてましたからね。ただ、私たちは本土から来ていますから違っていたはずですよ。母はやっぱり本土の生活がよかったようです。恨みつらみが強くてね、いつも父と喧嘩していました。満州つて言わず「腐れ満州」つて言つて。義兄を向こうに残してきたし、世の中がひっくり返ったみたいに生活が違いましたから。それで来年は、私をチチハルで日本人の方の手伝いをしながら下宿して女学校に通わせることを約束し、母はチチハルに住む日本人の知り合いを訪ね歩いていました。母は私を産婆さんにさせたかったんです。結婚しても働きましたから。私は小学校の先生になるのが夢でしたけどね。でもそれどころじゃなくて。

中学二年の夏休みに、十四歳のときに終戦を迎えました。情報が入ってこないから負けるなんて思いもしませんでしたね。ただ、私たちはその何日か前に避難していました。ただ八月九日頃から、ソ

連が押しかけてくるということで本部から連絡が来てね。すぐ集まりなさいって。本部に集まって、すぐ逃げたんです。一度は家に帰ると思ったんですが、着の身着のまま、そのまま逃げたんです。開拓団からチチハルに行き、終戦はチチハルでラジオを聞いてね。それから臥牛吐^{オニユウト}開拓団に行き、そこで住んでいた人の家に一か月ぐらいお世話になりましたかね。それでも大変でしたよ。家の中に隠れてね。地元の中国人が鎌を持って、家畜や農耕道具を持って行くのを見ても何も言えないでね。

そして臥牛吐から再びチチハルに来て、チチハル中学校で避難民生活をしています。ここでみんな亡くなりました。父は昭和二年の三月に亡くなり、チチハル中学校で生まれた妹の芳江も亡くなりました。母は昭和二年六月でした。私は一人になりました。みんな栄養失調でした。私もずっと栄養不良で、生きて帰ってきたのが不思議なんです。若い人が生きて帰ってきたんでしょうね。妹は消えるように亡くなりました。今、残留孤児っていますよね。思うのは、私がつう少し考えていたら、満州人に妹を預けていたら、もしかしたら妹つていうのがいたのかもって。でもそういう頭ないからね。子どもだったから。両親は満州へは本当に死に行っているんです。私は今は子どもも孫もいるからいいんですが、最初はよくそう考えていました。

チチハル中学校では、コウリヤンのおにぎりと、塩で沸騰させてカボチャを一切れ入れたおつゆが一日二回出ました。配給は男の人たちが日本軍の残した食料をソ連に運搬する使役に駆り出されて、

その駄賃を現物支給でもらったものを避難民に食べさせていました。ソ連軍が引き揚げた後からは、道を歩けたのですが、それまでは怖くて出られなかったですよ。まわりがだんだん落ち着いてきた頃に、私は満州人に使われてお蕎麦屋でお茶碗洗って、ちよつとずつ小遣いもらつて、トウモロコシのマントウを買って食べました。

これだけは忘れられないのですが、おめでたした女性をソ連兵が担いで連れ去ったんですよ。女性は泣き叫んでいました。私はそれが長いこと耳に残ってね。戦争ってこんなものです。経験した人じゃないと。私たちは何ごともなかったんだけど、それでも髪を切つて、鍋の底の煤を顔につけてね。一年間洋服もそのまま。顔も洗いませんでした。そのときは十四、五歳だから、男か女か分からなかったけど。ましてや栄養不良でしたから。

引き揚げは葫芦島^{コウロ}からです。八月に向こうを発つて、十一月の末頃沖繩に着きました。そのあいだ、錦州で二週間ぐらい滞在し、検査をしました。それから葫芦島に行つて船で佐世保に着いて、佐世保でも二週間ぐらいいました。沖繩に帰るためにここでも検査させられました。沖繩では那覇港に着いたのか分かりませんが、インヌミヤードウイに行きました。みんなは故郷に帰つたつて大喜びですが、私はどうなるのかなつて。小学校二年の夏休みに母とともに沖繩を訪れ、母の実家と父の出身である浦添の西原に来たことはありました。が住んだことはありませんでした。帰つてくるときには通吉おじさんと一緒に帰つてきて、沖繩でお世話になったのは三男おじさんで、そのおじさんの家からお嫁に行きました。学校のこと

えていましたが、結局学校に行けずね。置いてくれただけでも感謝しています。

数え十九歳のときに同じ西原出身で、六つ上の夫と結婚しました。夫は農業をしながら軍で配管工をしていました。子どもは五人います。子どもたちが小さいあいだはアメリカ兵の家でメイドをし、大きくなったら城間で和文タイプの仕事を定年まで勤めました。

沖繩に帰つてきたとき、一番言葉に困りましたが友達もすぐにできました。近所に私より一つ二つ上の人が出て、とてもよくしてくれて、今でも一緒に遊びに行く仲間なんです。恵まれていましたね。今は方言が一番簡単。それで、同じ満州帰りの當間信子さんに「ヤーヤ、ニシバランチュナットーサー」つて「アンシーヤー、クトウバマデウブティ（言葉まで覚えてね）」つて。

私が一番言いたいのは、日本人があちらにいたときにね、中国人を軽蔑してたんですよ。要するに自分たちは一等国民。向こうの人を見下げてました。一度母に連れられてチチハルに行ったことがあったんですけどね、そこで中国人がミージョーキーにピーナツやヒマワリの種、スイカの種とかを広げて量り売りにしてたんですね。したら、それを日本人の子どもがお金を払わずにとつて食べるんですよ。それを見て、母が「あんなことしたら大変なことになるんだけどね」つて言っていました。買って食べればいいのにみつともないやり方して。これはとっても覚えています。今思えば母は戦争に負けることを分かっていたのか、それは知りませんがね。

戦後落ち着いてから、「人の国に押し掛けて、人の入っている家か

ら主を追い出して、自分たちが入って。まして自分勝手な行動して。その土地の人がどんな思いを、どんな気持ちをしたのか」って。子どもからも馬鹿にされてね。それだけは今でも胸が痛んでね。悪いことは悪いんですから。私は、まともな人間がすることではないと思います。

【二〇一三年八月十六日下地智子・佐久川志麻調査】

沖縄県浦添市

大変な思いをした満州からの引き揚げ

喜舎場宗景

昭和九年三月六日

私の父は渡航前、宮城のムラヤー（今の自治会みたいなもの）のそばでダンパチャーを営んでいました。ダンパチャーだから情報も早かったのでしょう。「今度の戦争は」と、いつも口癖のように言っていました。「この戦は沖繩まできつと来るからね。大変だから、財産もあまりこっちにないし、あるのはある程度処分して、向こう行ったほうが得だよ」という風に言っていました。向こうに行ったら無事だと思ったでしょう。また、日本政府から旅費も支給されますし。それで私たちは、青雲開拓団の第十二次開拓団として両親、姉のヨ

シ子、弟の五人で満州に渡航しました。

鹿児島島の旅館に一泊した覚えがあります。行くときは子どもながらに勇ましかったんですよ。一等国民ということで行く道中でも堂々たるもの。向うでは日本人が来たらすぐ馬に乗って来て、水を汲んできてあげるんです。馬の水も準備してくれました。そしてウートートウするんです。そんなこともあつて気をよくしてね、私たちも子どもながらに。こっちはいい所だなあと思って。そんな覚えがありますね。向こうでは大豆や麦、ジャガイモなんかを作っていました。畑は現地の人たちと一緒に作っていました。話では三年契約で、三年経ったら馬や牛、畑を分けるという仕組みだったんです。

日本政府から分かりませんが、開拓団に魚が送られてきたこともあります。ちよつと贅沢でしたね。食には困りませんでした。向こうでは狼が来るので火の燃えた感じに見せるといって、帽子も赤い帽子。傘も赤い印なんかつけて大変でした。学校は人数が少ないので一年生から六年生まで全部一クラスでした。先生も同じで、教科書も同じものを使っていました。

父が現地の言葉を少し分かっていたので、日本語を教えてほしいという現地の青年と友達になりました。私たちの家に青年が来て、小さい私たちをかわいがってくれました。ある日、「変わったものを見せてやろう」と言つて、青年が手をかざすと、鷲が止まるんです。この鷲は山に連れて行ってウサギを捕まえてくるんです。これを見せたりしてくれました。またあるときには、現地の葬式を見に連れて行ってくれました。向こうの葬式は泣きのプロみたいな人に頼む

んです。その人が泣いて、笛を吹いて、馬の模型みたいなものを作って二、三ぐらい行列して。それを見ました。

チチハルへ引き揚げるとき、私らの開拓団は小さな子どもたちやお年寄り、荷物は馬車に乗せて逃げました。私は十歳ぐらいだったので歩いて逃げました。帰るときはもう、遠い彼方から爆音がするんですよ。真っ赤に燃えてね。何であんななるかね、こっちに殺しに来るのかなあと思っていました。後から聞いたら、日本軍が自分たちで作った橋とか家を爆破しているといっていました。何故かといえば、向こうには大変な書類もあつたりして、兵舎なんか爆破して、また攻めてくるもんだから。「馬賊、匪賊が来るからこの橋は爆破しないといかん」と言つて。本当か分からんけども、大人がそういう話をしているのを歩きながら聞きました。ただはつきり分かるのは、ずっと向こうで爆発音がガアッとしていたことです。父は眼鏡や時計も馬賊たちにとられましたね。

女性が連れ去られたという話は、別の開拓団の話で後からそうだったというのは聞いたことありますが、私たちの開拓団で連れ去られたとかいう話は聞いたことはありません。女の方は黒く塗って、男みたいに髪も短くして男みたいなのが恰好で来たという話を聞きましたね。「あんたがたは運がよかったね」という話はよく聞きました。ウチナーンチュは現地の人も優しくかったけど、ナイチャーは野蛮なもんだからいじめたんですね。いじめたもんだから、その仕返しかなあと心に思ってたんですよ。大変でした。帰るときは。

日本への引き揚げは、葫蘆島から佐世保経由でインヌミヤードウ

イに行きました。向こうに着いたら全身DDTをかけられて、大人も子どもも髪が真っ白になりました。それから、米軍のコンセットに入りました。うちでは「もし満州に行つてなかったら、ヤーニンジュのなかから戦争で半分以上は死んだんじゃないか」って言っていました。でも、無事だったかもしれないですね。今考えて振り返ってみると、いくら不自由なところもありましたけどいい体験だったんじゃないか、っていう気がします。

【二〇〇九年九月二四日又吉盛清調査】

沖縄県浦添市

アメリカ帰りの父、家族七人で満州へ

宮城高進

仲間生まれ

昭和九年八月二一日

私は屋号三男栗国小の父、宮城高牛の長男として生まれました。小学校三年生のときに、両親と姉二人、弟二人を含む七人で青雲開拓団のメンバーとして満州に渡航しました。父宮城高牛は普天間にあった高等学校（中頭高等小学校）を卒業後、十七歳のときに村役所で働いていましたが、二年ほどしてそこを退職して単身ハワイに

移民しています。そのとき、沖縄からハワイに行ったのは五人いて、浦添の当山から一人、後の四人は金武村の人だったそうです。ハワイでは五年契約で働いたそうですが、二年後に埒があかないということ、アメリカ本国に逃げたといっていました。十九歳ぐらいの頃だったと思います。

アメリカに来た当初は当然、英語が話せなかったといえます。あるとき、駅の果物屋でみかんを食べようと思つてのですが、分からずにレモンを買い「アメリカのみかんは酸っぱいな」と思いながら食べていたら、アメリカ人の女性が来て「これは食べるものじゃないので、これを食べなさいと」オレンジをもらつて食べたという話も聞いたことがあります。また、関東大震災があつたときは父のいたシアトルまで津波がきていたという話や、その後東京に行き、松坂屋の建物だけが残つていたという話も聞いています。

アメリカではアメリカ全土を渡り歩き、色んなことをしていたそうです。アラスカの船にも乗つていたそうです。船の中の缶詰工場で働き、そのコック長になったそうです。最終的にはワシントンでレストランを経営するなど、三七年間アメリカにいました。父は三八歳のときに妻探しのために一時帰国しています。港川出身の母と結婚したのち、母を沖縄に残し再び単身で渡米し、定期的に沖縄に帰つて来ていました。私は父が四九歳のときの子供でもです。

父は五〇代ぐらいのときに向こうでの財産を売り払い、当時の五〇〇〇ドルを持って沖縄に引き揚げてきました。生前、父は「当時五〇〇〇ドルの現金を持っていた人は沖縄にいなかったんじゃないか」と話していました。

いか」と話していました。

沖縄に帰つてきた後、父は「今度はブラジルに行く」と言いました。家も売り払つて家族みんな那覇の旅館に泊まつていたとき、福岡の栃木造船所に勤めていた母の兄が訪ねて来て「向こうに行ったら大変だよ。自分の所にきて会社勤めしなさい」と言い、結局福岡に行き、父は栃木造船所で働きました。私が五歳のときでした。

福岡には二年ぐらいいました。私は若松国民学校に入学したのですが、沖縄では方言ばかり使つていたために、標準語が分からず大変でした。学校には朝鮮人が五人ほどいたのですが、日本語があまり上手ではなかった私も朝鮮人と間違われていましたし、実際に朝鮮人と仲よくしてもらいました。

福岡では最初社宅に入っていました。父が「社宅はだめだ」と言つて山のでっぺんに家を造りました。でも、父が出張で家を留守にしていたとき、台風が来て母が「この家は危ないからよその家に避難しよう」と言つて避難しているあいだに、台風で家がなくなっていました。出張から戻った父は「自分の家がない」とびっくりして、これではどうしようもないからと沖縄に帰りました。そして昭和十七年に満州に行きました。父は六〇歳近くなっていましたね。

満州へは朝鮮経由で行きました。日本から朝鮮に渡る船のなかで正月を迎え、朝鮮のデパートで防寒具を買つたのを覚えています。しかし、途中で母が亡くなつてしまい、結局母は満州に行くことができませんでした。

私たちが現地に着いた三月頃は、ちょうど雪解けのときでした。



青雲開拓団本部の前で [宮城高進氏提供]

父はフラルキから写真屋を呼んで家族写真を撮りました。

私たちが入植した青雲開拓団はチチハルから二八里離れた所になりました。本部は開拓団の中央にあり、そこから何部落、何部落という形で分かれていきました。最初は本部に一時住んで、それから各部落に行きました。私たちは東の方にあるハマタイという部落にいました。開拓団の警備として、照屋さんという方がいて、彼は私の家に下宿していました。また、中国人の世話係として、二五、六歳頃の男性がいました。日本名もあったのですが、私はよくこの人から中国語を教わっていました。私の通っていた学校の門に掲げられた「青雲国民学校」という文字の中国読みも教えてもらい、今でも言うことができます。

開拓団には商店はなかったので、買い物は街まで行きました。野菜とかトマトとかスイカとか作ったとき、これを馬車に積んで売りに行ったりしましたね。そして、その帰りには必要なものを買って帰ってきました。ほとんど自給自足のような生活でしたね。

向こうでは冬になると、普通に零下三五度ぐらいまで下がっていました。寒いときには零下四〇度まで下がっていたと思います。満州では井戸の中の水は完全に溶けることはないのです、水を汲むときには棒で表面の氷を砕いて水を汲んでいました。日本ではそういう光景を見たことないけど、満州ではこれが当たり前でした。井戸の中にスイカを入れて、冷やして食べたりしていました。

それから、向こうでは夏の間に玄関の前に大きな穴を掘っておいて、冬、お椀なんかを洗った水をそこに捨てるんです。もし穴を掘らずにそのまま捨てると、そこが氷の山になってしまうので、穴を掘る必要があるんですよ。満州では十月頃から雪が降ります。いったん雪が降ると来年の三月まで解けることがありません。そうなる前に、玄関の前に穴を掘る作業をしていました。また、トイレも沖繩とは違っていました。満州の都会や沖繩では、昔は汲み取り式のトイレでしたが、開拓団のような田舎ではトイレというのはなかったですね。屋敷の近くで用を足すと、そのまま凍っていくのでそれを蹴って壊していました。

他にも、冬のために貯蔵庫も掘って、そこに冬に食べる野菜、キャベツやニンジン、ジャガイモなどすべて保管していました。肉はそのまま凍ってしまうので、保存のための処理はしていません。

満州の家はレンガ造りで、床が高くオンドルになっていました。夏にトウモロコシのガラとかなんかを畑から持ってきて、家の横に積んでおいて、冬には床の下にそれを入れて火をつけて暖をとっていました。束ねたガラを床下の窯に五束ぐらい入れて、火をつけて扉を閉めます。そしたら明るる朝まで暖かいんです。たまに火が強すぎて蒲団が焦げるときもありましたね。都会では牛糞や炭を使っていたようですが、私たちの所では植物のガラを使っていました。こういうことは、他の人はあまり記憶にないかもしれませんが、私は覚えています。

八月十三日の晩、日本人はチチハルにみんな来なさいといわれました。チチハルと開拓地のあいだに鉄橋があって、これを爆破するから早く来なさいと。渡っておかないとチチハルに来られなくなるから、いつまでに来なさい、ということだったのです。

そういう連絡が来たので、私たちは家をほったらかしてチチハルまで逃げてきました。チチハルには翌日の十四日に着いたのですが、そのとき、チチハルの街は大騒ぎでした。日本兵もやけになって日本刀を振り回していたので、「もうこつちには住めない」ということで、今度は臥牛吐開拓団^{オニユウト}を目指して行きました。距離にして二〇〜二五里ぐらいあったと思います。その道中に日本が負けたという情報が入ってきました。

臥牛吐開拓団は都会から離れているからか、ソ連が攻め込んできていることも分からない状態でした。私たちはそこに一か月ぐらい生活していましたが、そのあいだ、日本兵が逃げてきて一緒に暮ら

していました。

しかし、九月頃にソ連兵に開拓地が包囲されてしまい、日本兵はロシアに連れて行かれ、私たちも武器を全部とり上げられてしまいました。すると、今度は強盗が入ってきたので、みんなそろって再びチチハルへ行き、収容所に入りました。

私のいた所は特に囲いがあつたわけではなく、自由に外に行くことができたので、中国人が食べ物なんかを売りに来ていましたし、また私たちが外に出て稼ぎに行くこともありました。

私たちが臥牛吐開拓団からチチハルに戻ってきたのは九月の半ば頃でした。そして、ちょうど冬がやって来た頃に父と二女、三男が発疹チフスにかかってしまいました。長女は家族の看病につきつきりだったので、私は二つ下の二男の弟を連れて、リヤカーを引いて山から氷をとって、みぞれなんかを作っているお店に持って行って売ったこともありますし、袋を持ってチチハルの街全体のごみ箱から炭のガラを袋一杯に拾い集めて、それを工場なんか売りに行つたこともあります。

初めて行く工場では子どもだからと馬鹿にされて、本当は三〇斤あるのを二〇斤しかないといわれたことがあります。私は向こうの言葉も分かるし、いつも担いでいるから重さがどのぐらいあるかも分かっているので、中国人と駆け引きすることがよくありました。

一日に私は五〇円、弟は三〇円ほど稼ぎました。稼いだお金は、私たちの明日の弁当代一〇円分を残し、あとは買い物に使いました。父たちの病気を治すため、肉を一斤、二五円分と、シンジして飲ま

せるための人參なども買って帰りました。

また、同じ年頃の子ども四、五人ぐらいで、まんじゅうの万引きをしたこともありました。チチハルの市場では、中国人のおばさんたちがまんじゅうをつくって、ざるに入れて売っていました。そのざるからみんなでまんじゅうをとって、一人がおばさんに「いくらですか」って声をかけるんです。そして向こうが「いくらです」って言う。「それは高くて買えないから」と言ってざるに戻すのですが、一人はわざと戻さずにそのままとってポケットに入れたんです。そんな風にして街のあちこちにある市場を一日中回りました。一つの所からとるのは一個と決め、とったものは家族にお土産として持って帰りました。

冬を過ごした後、父は私たちが使っていた防寒具を生きるために売ろうといってきました。食糧と替えるためです。私たちは「防寒具がなかったら冬が着たら大変だ」と父と喧嘩しました。でも父は「どうせ次の冬はここで暮らせない。日本への引き揚げもあるから冬までは待たない」と言い、結局、防寒具は二女と一緒に街で売ってきました。しかし、その二、三日後には引き揚げ命令がきましたので、着の身着のままチチハルから汽車に乗りました。汽車では貨物車両に乗せられたので、途中のトンネルに入ると煙がなかまで入って来て、みんなミーハガーになっていました。汽車のなかで亡くなった人もいました。引き揚げ地の**葫芦島**に着くまで一か月かかりました。汽車から降りて、さらに二里ほど歩かされました。

葫芦島に着くと、父が最後のお金で芋を買い、一人二本ずつ食べ

ました。そして、そこから船に乗って、朝鮮で亡くなった母を除く家族六人で佐世保に上陸し、沖縄に戻ってきたのは十月ぐらいでした。浦添に着いてトラックから降りたときには、収容所の所では運動会をしていました。

学校は小学六年生から始めました。あの当時は教室がないので、木の下で勉強し、それから茅葺の学校ができて、地面の上に机を置いて勉強するようになりました。

戦後、父はボリビア移民を希望しましたが、私の反対もあつて行かず、一〇二歳で亡くなりました。

今は畑でサツマイモやトウモロコシ・キュウリ・モーウイ・マクワウリなどを植えて、世話をしています。一番上の姉はもう亡くなりましたが、他のきょうだいは今も元気です。

【二〇一三年二月二日下地智子・佐久川志麻調査】

沖縄県浦添市

あの頃を振り返って

嘉数キク子

沢岷生まれ

昭和十一年三月

私は両親・長女の信子・二女の節子・そして弟の和雄とともに、昭和十九年、第十二次青雲開拓団として満州に行きました。父の嘉数英吉は先発隊で、私たちよりも先に向こうに行つて、作物を作っていました。先発隊に同じ字の新垣^{あざしんがき}実さんがいて、あの人が帰つてきて「満州という所はいい所だよ」つて、向こうの大豆を実際に持つてきてました。それで父も行く気になって、実さんと一緒に先発隊で行ったんです。その前に父は、満州事変のときに中国の東北地方に行つていたことがあり、広大で肥沃な土地を見て、「沖縄では二男が耕す土地もないし、兵隊にとられるから、それよりは満州に行つた方がいい」つて言うこともありました。島尻の人もそういう考えでたくさん行っています。

一週間は泊の船員会館にいて、那覇港から出ました。船の名前は覚えていませんが、煙突に大きな土の字みたいなのが書かれていたのは覚えています。マークみたいでしたね。鹿児島に着いたあと、長崎にいた父のいとこを訪ねるため、二女の節子と私は父と一緒に長崎に三、四日ほど行き、母と長女の信子・弟の和雄は鹿児島に残っていました。それから下関で母たちと合流し、船に乗って釜山に行

きました。そして、釜山から汽車に乗ってハルピンで乗り換え、ハルピンからチチハルに行き、チチハルの弁事所から父が持つ馬車に乗つて、二時間かけて団に行きました。真っ白い雪の原を馬車で行くですよ。馬の息が汽車みたいにハア、ハアして。そして、嫩江^{ネンギヤウ}が凍つていてね。カーラ（川）の上を馬車で行きました。

団に着いたのは旧の三月三日でした。最初は本部に行きました。先に入植していた仲間の宮城さん家族らに迎えられました。真壁村から来た方たちもいました。団長さんは伊敷さんといって、本部にいました。

父は団で班経営をしていました。班は四所帯ぐらいでしたね。次の年は個人経営になる予定でした。個人経営になって作物をたくさん作ったら、父は沖縄から自分の兄を呼びたいという希望があったみたいです。向こうの畑はとても広くて「こんな大きい土地どうやって耕すかね」と思つたくらいです。氷が溶けたら馬に犁を引かして畑を耕して、種をまきました。母は弟の面倒を見ていたので、台所は姉の信子の仕事でした。

次の年に、私たちは水田に引越しました。父は新垣実さんと世話係のようなことをしていました。水田に引越してからはお米や野菜・スイカなど食べるものは何でも作っていました。田んぼには魚もいました。

私たちがまだ本部にいたときのことです。本部の西の方に、中国人の集落があつて、村長さんの長男の結婚式に、本部にいる開拓団の人たちが呼ばれ、ごちそうをいただきました。私たち子どもまで

呼ばれたんですよ。それから、本部から東に五〇〇メートルほど行つた所には、中国人の一軒家があつて、親しくしていました。正月には私たちが向こうを招待して、旧正月には私たちが招待されて水餃子をいただきました。向こうの人はウチナーの人と同じで、カメラ攻撃にあいましたよ。

終戦のときは、チチハル中学校の避難所に着いた翌日から、姉の信子は仕事を探しにチチハルの街中を歩きまわったようです。最後はお医者さんの家に住み込みで働き、沖繩に引き揚げる前日までそこで働いていました。青雲開拓団は子どもたちをみんなで守りましたよ。捨てたりあげたりするのはいいんです。

父はチチハル中学校で亡くなりました。亡くなる前に、どこの開拓団かわかりませんが、遠い所に団を代表して、島尻の人と馬に乗って農耕馬を受けとりに行つたんです。そしたら、帰つてくるときにお腹を壊してしまつたんです。それがなかなか治らず、完治する前に終戦になって、そのまま避難させられてしまつたんです。避難したらお米のご飯はなくて、コーリャン飯でした。コーリャン飯では栄養はとれなくて、結局、栄養失調で旧の正月に亡くなつたんです。ものすごい寒いときで、土が氷になつてゐるから掘れないんですけど、浅く掘つて、二女の節子と元気な男の人と一緒に、父を埋めました。雪をかぶせたお墓でした。入植してから生まれた一番下の子ども、笑ちゃんは避難のときには四か月でしたが、お乳が出なくて、父が亡くなつた十一日目に餓死してしまいました。笑ちゃんの遺体は父の側に埋めました。

その頃、姉の信子は私たちを助けるためにマンジンヤ（満州人の家）に儲けに行つてました。母は「お父さん、狼ンカイ、野犬に食いちぎられてないか見に行きなさい」つて言うんですよ。それですぐ上の姉と私は雪の中を行つて、掘り返された跡がないのを見て「お母ちゃん、お父さんは大丈夫だったよ。なんでもなかったよ」つて、冬の間何回も見に行きましたよ。春になつて、日本人が建てたチチハルの飛行場が壊されました。それで私たちは、飛行場から材木をとつてきて売ろうと思つていたんですが、母が「トリーバーヤサ、お父さん火葬シーイカヤ」つて。それで、信子姉さんも呼んで、きょうだい三人で大きい材木を二宮金次郎みたいに担いで運んできました。そしたらロシア人が「材木をとりに来るから運動場に集めなさい」つて言うんです。他のみんなは言われた通りに材木を出したんですが、母は「これはお父さんを火葬する材木だから出さない」つて。それで伊敷団長に相談したら「必要な分は隠しておきなさい」つて言われたので煙突の入口に隠して、後から父と妹を火葬し、遺骨を持つて帰ってきました。

引き揚げは葫芦島です。葫芦島に行く途中、戦争（内戦）のために貨車がたまに止まつたんですね。野原でも止まりましたよ。そのときに馬賊が来て、貨車を覗くんです。だから「止まつたらみんな毛布被つてシーンとしておきなさい」つて。言われた通りにした覚えがあります。重慶軍と八路軍の戦いで汽車が走れなくなり、貨車を降ろされて歩いて橋を渡つたこともあります。そのとき、重慶軍か八路軍かわかりませんが、母に銃を向けて「早く歩け」つてした

んですよ。早く歩け早く歩けつてするもんだから、もう心臓ドキドキして。そんなことがありました。私たちは葫芦島に着いてから引き揚げまで、一週間ぐらい待ちました。

上陸は佐世保です。その前に、沖に一週間ぐらい船の中で滞在させられました。沖縄は那覇港に着き、インヌミヤードウイまで運ばれて、DDTをまかれました。

戦後、満州を訪ねて行ったことがあります。本部の後ろにあった墓場は掘り起こされていたんですけどね、その村長が来て青雲開拓団のことを覚えていましたよ。村長の話では「お墓の所は道を作るから、別の所にまとめて祀ってある」って言っていました。祀つてある所には行けませんでしたが、元の所でウートートーしましたよ。

みんなが拝んでいるあいだ、入植地で子どもを亡くした女性が大声でその子の名前を呼んだら、いつの間にかワァーっとトンボが、真っ黒いトンボが来てね。どこから来て、クルクルまわってるんですよ。すごかったですよ。最初は危ないからって、現地に行くことを止められたんですけど、ここはとっても寛大な気持ちでね。

あの頃を振り返ってみてね、なんだったんだろうって思いますよ。寒い思いもしたし、アワレもしたんですけど、沖縄だけにいて、戦争で掻き回されるよりは、という思いもありますね。

【二〇一〇年二月五日又吉盛清調査】

沖縄県浦添市



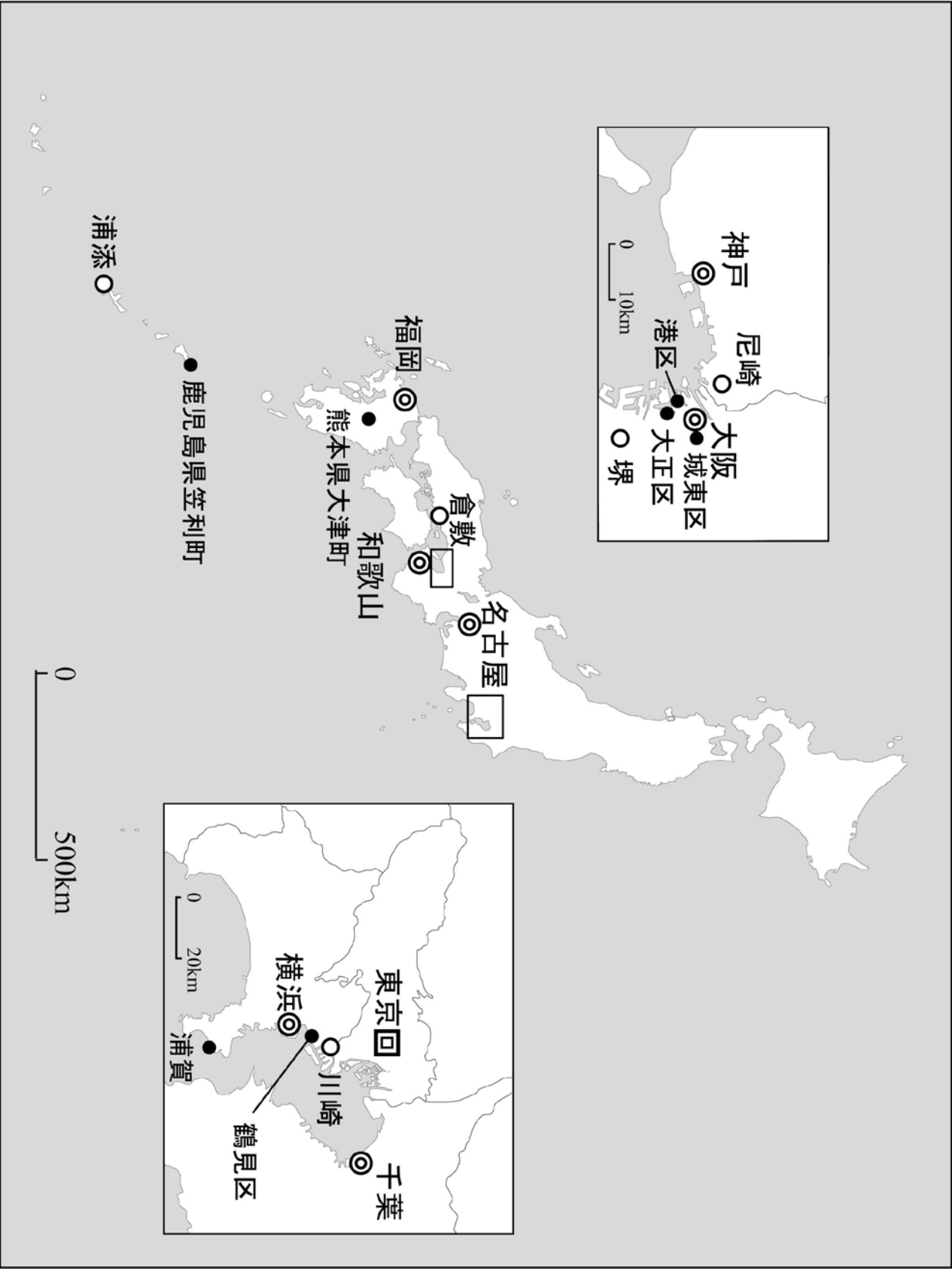
戦後、訪れた青雲開拓団の墓地で線香をあげる参加者 [1998年 宮城高進氏提供]

日本本土

MAINLAND JAPAN

明治期より沖縄から日本本土への出稼ぎはみられた。その後、第一次世界大戦に伴う好景気により、工業地帯では全国各地から仕事を求めて出稼ぎに来るようになった。当時不況にあえいでいた沖縄からも、数多くの若者が日本本土に渡り、男性は主に製鉄所や製材所、女性は製糸・紡績工場で働いていた。しかし、労働条件の悪さに加え、いわれのない差別を受けるケースも少なかった。





たわし工場から軍需工場へ

又吉藤子

牧港生まれ

大正十年十一月十八日

私は父又吉幸良、母カマの三女として、牧港で大正十年十一月十八日に生まれました。実家の屋号はカミークラニーです。夫は又吉盛秀、大正九年三月十日生まれです。きょうだいは男二人、女五人の七人で私は三女です。長男兄さんと長女姉さんは亡くなりました。もう一人の姉と私と二男、妹二人の五人は元気です。

実家の家族は、戦争での被害はありませんでした。父は戦前に亡くなっており、母と、姉と二男の三人は島尻に避難し、四女は結婚して山原に疎開しておりました。兄も兵隊に行きましたが、元気に帰ってきました。

夫とは疎開先の熊本で結婚し、一緒に帰ってきました。熊本からそれぞれの家に帰り、改めて結婚式を沖縄で挙げました。夫は戦後、牧港の区長や村の議員を務めました。去年、三年忌を済ませました。

戦前、私は妹二人と一緒に名古屋の東区にあるたわしやほうきを作る工場へ働きに行くことにしました。牧港全体では十四、五人は送り出されて行ったと思います。男性は兵隊に行つて人手が足りない、ということと女性の募集もあったようです。

内地へは友達同士で行こうかねと話をしていましたし、沖縄は何

もありませんでしたから喜んで行きました。その頃は沖縄の普通の家庭の食事といえば芋で、ご飯はお正月とか何かの時にしか食べることはできませんでした。けれども、内地ではご飯も何でもあると聞いていました。ですから、内地へ働きに行くと、口を賄うということで親も喜んでいました。現在の子どもたちには理解できないと思います。私たちの時代は、いくら生活が楽でも、行くのが楽しかったです。旅費は出した覚えがありませんので、儲けから引かれていたと思います。

出発前には親たちが（無事を祈つて）仏壇に手を合わせてくれたいたと思います。この頃は兵隊へ行く人のための祈願祭も頻繁にありました。

私は人絹（絹に似せてつくった再生繊維。レーヨン）の着物を準備して持つて行きました。

この工場には、同じ牧港出身の又吉テイさんが名護出身の比嘉キイゲンさんと結婚して一緒に働いていました。この方の両親をとおして私たちは名古屋へ送り出されました。名古屋までは途中大島に寄つて、四日ほどかかったと記憶しています。比嘉キイゲンさんは、私たちが汽車の乗り方もよくわからないので、神戸港まで迎えにきてくれました。神戸港から名古屋までは一日かかりました。

私たちは下宿賃を払つて社宅に入りました。社宅は丸い木の皮で造られた建物でした。

朝八時頃から夕方五時頃まで働いたと思います。ご飯は本当に贅沢でした。三度食べました。夜食を作る人もいました。お風呂に入っ

て、それから食事をしました。

休日は一か月に二、三回ありましたので、たまには街に遊びに出ました。着物を買うときも言葉が分からないから、堀井さんという経営者を連れて行って、着物を買いました。親は喜びましたよ。結婚するときこの着物があるから。だけど人絹の着物だからユルユルして、今はもう着ることはできません。当時は木綿など上等なものではなくて人絹だけでした。帰ってきたらその着物をほどこいて子どもの洋服を作ったりして着せました。

親は「一〇〇円貯めればいい」と言っていましたので、仕送りはしませんでした。一〇〇円貯めたら、当時はとても儲かっているといわれましたよ。あのときは、二〇歳ぐらいだったのでとても面白かったですよ。ご飯もいっぱい食べて、自分が着るのも買って、楽しかったですよ。

たわし工場には牧港の女性が、二、三〇人、男性も二、三人はいました。また大謝名からも二人か三人はいました。比嘉キイゲンさんは責任者で、奥さんのテイさんは食事の賄いをしていました。

たわしはよく売れました。たわしを引き取る人は馬車を持って来ていましたよ。ほうきは別の部屋でつくっていました。

戦争が激しくなると、「たわしは平和産業」ということでたわし工場も廃止となり、辞めさせられて鉄工所で働くことになりました。

鉄工所のあった名古屋の中区は、たわし工場のあった東区よりも街でした。鉄工所は個人のものでしたが、門も鍵がかけられて、外部に漏れないようにして飛行機のネジやナットを作りました。昭和

十七年には戦争も始まっているし、船も止まるというので妹二人を先に帰して、私は名古屋空襲の前に沖縄に帰りました。二一歳になっていたと思います。

昭和十九年の八月頃、名古屋から帰ってしばらくしてから、兄嫁と妹、おい二人を連れて熊本へ疎開しました。一二歳のときです。家族疎開でした。

私たちは対馬丸が沈没する前に行きました。対馬丸がやられたと聞いて大変だったねって思いましたよ。私たちの次が対馬丸だったはず。船が出る前の晩は那覇に泊まり、鹿児島に着いてみんな自分の荷物をとって熊本まで行きました。熊本の高森に着くと、国防婦人会がたすきをかけてお迎えしてくれました。

私たちは高森の天理教で生活することになりました。天理教の方々はとってもいい方々でした。到着後一週間ぐらいいはごちそうを作って慰問に来てくれました。子どもたちも沖縄では芋ばかり食べていたので、喜んでいました。お風呂にも入れさせてもらいました。

ここでは、味噌工場で味噌作りの仕事をしました。味噌工場は、職員が戦争で動員されて人出が不足していたので、疎開民の私たちが働きました。当時は味噌も配給でした。お給料がどれだけだったかは分かりませんが、麴を作ったり味噌を作ったりして稼ぎました。疎開の最後あたりにはアダンバ帽子を編みました。

熊本で一緒に行った義姉の母が赤痢にかかり、向こうで亡くなりました。畑の所にあった隔離室に入れられ、私は付き添いだったので、義姉の子と一緒に看病していました。遺骨はちゃんと持って帰っ

て来ました。

夫盛秀の両親は父が又吉山戸、母が又吉カマです。二人はフィリピンに行き、病気になる戦前に帰って来ています。男子三人、女子二人を産んでいます。夫は長男で、二男は数え一七歳で防衛隊に取られて戦死しました。

夫は戦争前、十八歳で南洋にも行っています。テナンだったと思います。二か年おり、兵隊準備で二〇歳には帰ってきました。南洋では最初はサトウキビの仕事をし、次に内地から来ていた米屋の使用人になり配達の仕事をしたそうです。みんなは南洋でキビを倒し、キビの葉を刈りに行ったりしたけれど、自分は南洋行つてよい仕事をしたつて言っていました。兵隊に行く準備で帰郷するときに、この仕事は後の人に譲ったそうです。米屋の主人もいい人だったそうです。米屋の主人は福岡の人だったと思いますが、この人のために朝早くから車のエンジンをまわして働いたそうです。米は内地から送ってきたと思います。夫は二一歳で軍に入り、台湾に六年もいました。台湾からはティモールを経由して名古屋に上陸したそうです。

夫の家族、妹たちも熊本に疎開していたので、夫は家族を探して疎開先に来ていました。

熊本から沖縄に戻るときは、鹿児島から船に乗りました。日本の船でしたが客船ではなく、行きも帰りも荷物を運ぶ船だったと思います。

那覇港に上陸し、インヌミヤードウイに一晩か二晩泊まって、そ



又吉藤子さんへの聴取調査の様子 [2009 年撮影]

親に内緒で紡績へ

西原文子（旧姓又吉）

牧港生まれ

大正十五年十一月三日

それから仲間部落に行き、そこからまた、めいめい自分の字に^{あそ}戻りました。仲間には大体一年余りいたように思います。はっきりは覚えていませんが、テントヤーを造って入りました。仲間にいるときは、少しかけ軍で働きました。仲間には何もなかったたので親たちと野菜を植えました。

牧港へ帰って見たら、地元は中通りも立派にできていました。隣の宇地泊にいる親戚が、宇地泊は車も入られなくて、牧港はいいねって言うていました。戦後の牧港は農業しかありませんでした。現在の動物団地の所は牧港の田んぼでした。夫は戦後区長や議員をしていたので、私が中心になって田んぼをやりました。

二〇年ほど前に疎開先を訪問しました。天理教の奥さまは、足を悪くしていて車椅子で出てきて「こんな遠いところまで来てね、ちよつとあがつて行きなさい」って言うてくれました。

【二〇〇九年十二月十六日井口学調査】

沖縄県浦添市

私は大正十五年十一月三日、牧港で誕生しました。父は又吉永徳、母はカマドで、両親は働き者で家は篤農家でした。田んぼがあり、畑にはサトウキビとサツマイモを植えていました。私は八人きょうだいの最初の子でしたので、小さな頃から弟妹の子守ばかりさせられていました。それが嫌で、紡績に行きたいと思っていました。

浦添尋常小学校高等科二年を卒業し十八歳になっていましたが、募集人と岡山県の倉敷紡績へ行く相談がまとまったのです。幼馴染の又吉百合子さんと一緒でした。多分、そのときは牧港から倉敷紡績に行ったのは私たち二人だけだったと思います。年上の人たちは、大分の中津の紡績に行っていましたね。紡績はその頃流行でした。倉敷紡績はどちらかというと、宜野湾の人が多かったです。一緒に行った百合子さんは、もともと又吉文という名前で、私も独身の頃は又吉文子ですから、氏名が似ていて、内地に行ったらこんがらがつてしまい不便でした。どっちかが名前を変えようということになり、百合子さんが又吉文から又吉百合子に改名しました。

募集人はウチナンチュで、会社の人でした。その頃はすぐには自由に本土に行けなかった時代です。挺身隊といって役所から通知が

来ないと行けませんでした。私たちは紡績の募集人のおかげで行くことができ、募集人も一緒に行きました。

昭和十八年二月二十六日、沖縄を出発しました。着ていくよそ行きの着物もないので、隣家のお姉さんの着物を借りました。親に相談をせず内緒だったので、ボーシ会社が集まってこっそり手続きをしました。

湖南丸という船で行きましたが、この船はその後数回の沖縄航行の後米軍により沈没させられました。この湖南丸の船中で出会った比嘉清子というお姉さんが、のちに「紡績を逃げ出す」という思い切った行動を私たちに教えたのです。「逃げた」ことを話すかどうかで、ずいぶん悩みましたが、「何十年も前で時効でしょうから」と決心して話すことにしました。

思い切った行動というのは、二人とも倉敷紡績から「逃げ出して」兵庫県のハリマネジ工業所（当時八木工作所）という個人事業所に移ったことです。募集人には旅費も払っていないので、損をさせたのではないかと今でも気になります。

湖南丸の船中で知り合いになった宇地泊出身の比嘉清子お姉さんが「自分もあっちまで行っただけとても大変よー。結核になるよ。他の所で働きなさい。自分が世話してあげるから」と熱心に話しかけてきました。お姉さんには、さらに「自分が船から逃がすけど、どうする？」とも言われました。本土は初めてで西も東も知らないから、慣れるまでもう少し待って下さいと二人で言って、そのときは決心がつかず、そのまま紡績に行き、紡績女工として働きました。

紡績では寄宿舎に入り、二人とも織布の担当でした。一日の仕事が終わると、紺色の制服の上から下まで、綿花で真っ白になりました。頭は帽子をかぶっていたので大丈夫でした。これでは大変だ、結核になると心配しました。そこで、いつ逃げるかねー、いつ逃げるかねーとそのことを考えるようになったのです。

清子お姉さんは全く知らない人でしたが、本当にとっても親切な人でした。倉敷に行ってから半年ほどして、お姉さんが面会に来て、再度紡績から逃げることを勧めたのです。逃げるための準備を具体的に教えてくれました。「必要のないものは沖縄に送り返し持ち物を軽くしておきなさい。必要なものは私に預けなさい。また来るから」などと教えてくれたので、当面必要ないものは沖縄に送り返ししました。

その頃はもう灯火管制が始まっていたので、灯火管制の暗闇を利用して逃げることに二人のあいだで相談はできていました。その夜は、下からはワンピースなど、逃げた先で着る夏用の服を数枚重ね着して、パンツも何枚もはいて、上からは冬服を着て寝ました。

紡績というのは歌にもあるように、周囲は高いレンガ塀で固められて、また外濠に囲まれていたので、これは「ヒンギラルル所はネーンドーヤー」と、どこも抜け出すところはなかったのです。日曜日になるとどこか抜け出せる場所はないかと、周囲を捜しまわりました。すると一か所、板の棧が段々に打たれている塀を見つけましたので、ここから逃げようということになり、希望が出てきました。

逃げる日は寝たふりをして、時間通り灯火管制になって空襲警報

が鳴り、電気がみんな消えたので、「とう、ナマヤサ（それ、今だ！）」とばかりに、二人で寢床を抜け出しました。先に私が棧に足をかけ、後ろから百合子さんが押し上げてくれました。私が塀に上がると、それぞれが二個ずつ作っていた風呂敷包みをポン、ポンと下に投げ落として、塀の上に馬乗りにながって、次に百合子さんが上がって来るのを手伝いました。ところが、百合子さんを下から押し上げる人がいなくて、なかなか棧まで足が届かないのです。ずいぶん、やきもきました。私は上から「ナーウヒグワー、ナーウヒグワー（もう少し、もう少し）」と声かけして、やっと私の手が届くところまで上がって来たので、引つ張り上げ、二人して地面に飛び降りました。暗闇のなかで風呂敷包みを開けて、この先出会った人に見とがめられないようにときちんとした服に着替えて、それから駅に向かいしました。倉敷駅への行き方も、前もって下調べをしていましたので迷うことはありませんでした。周囲は田んぼだけでした。

比嘉清子姉さんが地図をきちんと書いてくれたので、説明のとおり汽車に乗って、ここでも途中で迷うことはなかったのです。二ブイカーブイしながら神戸駅に着き、市電に乗り替える頃は、夜はもう明けていました。地図を頼りに、お姉さんの家まで辿り着きました。

お姉さんは朝鮮の男性と結婚しており、下宿屋をしていました。下宿人には宇地泊の男の人も数人いたし、朝鮮の人も三人ぐらいいました。一か月ほどここで厄介になりました。お姉さん夫婦は食事代も宿代も少しも要求しませんでした。大変人のよいお姉さんでし

たね。外に出て、見つかったら半殺しにされるからといって、外出をさせずにただで面倒をみてもらいました。

お姉さんは宇地泊の屋号トーの人で、ワラビナーはウシー、トーのウシー姉さんといいました。二〇代から三〇代くらいで、当時は立派な大人でした。私たちは十八、九のワラビでしたからね。また、宇地泊と牧港は「マチナトウ・ウジドウマイ」と言ってケートウナイ同士で、昔から親しみあつてきましたので、そういう安心感もあつたかもしれません。

しばらくして、お姉さんと一緒に仕事を探しに行き、神戸の東尻池町のハリマネヂ工業所で働くことになりました。自分たちで歩いて探したと思っていました。もしかしたら、ゴム工場で働いていたお姉さんの夫の伝手^でだったかもしれません。小さな鉄工所で飛行機の部品を作る工場でした。社長は八木源蔵さんでした。

お姉さんの家から下宿に移り、ネヂ工場に通勤しました。安い所を探したから線路の側の下宿で、汽車が通るたびに部屋全体が揺れました。その後新しい下宿へ移りました。

私は体格が小さかったので、小振りの機械を持たされてネヂ切り、背が高い百合子さんは旋盤の担当で、ちょうどNHKのドラマ「梅ちゃん先生」に出ていたような機械でした。この会社は全体で二〇人くらいの人が働き、そのなかで女性は四、五人いて、沖縄出身は私たち二人だけでした。オイル不足で天ぷら油を使用していて、工場内はいい香りがしていました。

紡績では二か月にも満たない働きだったので、送金するどころで

はありませんでした。それでも、弟たちが一年生に上がるときにはランドセルを買って送ってあげ、大変喜ばれました。その弟も沖縄戦で亡くなりました。家からは「双子安産、父徴用、スグカエレ」と電報が来ましたが、もうその頃は帰れませんでした。両親も戦争で亡くなりました。

やがて、神戸でも空襲が始まるというので、工場全体を江井ヶ島という明石と姫路のあいだの、田んぼと畑のなかにある酒造会社の跡に引っ越し、機械も移動させて仕事を継続しました。寮生活で防空壕に入ったり出たりしましたが、幸いここは田舎だったので、空襲はありませんでした。姫路の空襲を防空壕のなかから見ていました。

工場が疎開してからは会社の寮に入り、食事と同じものをみんな一緒に食べました。食糧難で大豆入りご飯を食べさせられて、お腹をこわすことがよくあり、着物ジラミも湧いて大変でした。毎日ドラム缶にお湯を沸かして服を熱湯で洗っていましたが、それでもシラミは湧いてきました。どこから来るのか本当に不思議でした。着物の縫い目にびつしりと卵を産んでいました。

八月十五日、会社の寮で天皇の終戦の言葉を聞きました。天皇のことばを聞くのは初めてで、まるで神様の言葉を聞くような気持ちではありました。しかし、沖縄がやられたという情報は何となく聞いて知っていたので、なんでもっと早く、沖縄がこんなににならないうちに、やられる前に降参しなかったか、天皇の言葉を聞いてから悔しくて地団太を踏んで泣きました。

そういえば、ネズ工場にも清子姉さんは訪ねて来て、私たちに「沖縄に帰ろう」と誘いました。沖縄行きの船がなくなつて帰れなくなるから、船が航行している今のうちに帰ろうと強く誘われました。「親の顔を見なくてもいいの？親に元気な顔を見せなくてもいいの？」と誘いました。神戸の寮に来て間もなくで、「ナーマタカラも貯めてないし、シナディでは帰れない（まだ来たばかりなのでお金も貯めていない。手ぶらでは帰れないから）」と言い訳をしたので、お姉さんは一人で沖縄に帰りました。それが、恩を受けた清子姉さんの最後になったのです。

お姉さんはそのとき妊娠していたようで、沖縄で男児を産んだということですが、沖縄戦で親子とも亡くなったのです。位牌は長いことお兄さんの家に安置されていましたが、西原のお寺に預けてあるということを宇地泊の人から聞きました。ずっと気になっているのですが、まだお参りに行ったことはありません。

ネズ工場は家族経営で、八木社長のきょうだいの鈴木スエさんというおばさんはとくに親切にしてくれ、大変お世話になりました。戦後すぐに百合子さんが九州に去った後、一人になった私を引き取ってくださり一緒に暮らしました。今考えてみると、あらゆる人の世話になっていましたね。この方もついこのあいだ亡くなりました。旦那さんがいない鈴木さんは舅と一緒に暮らしていました。

戦後、沖縄に帰るといふときに、この家族の方々は私たちを帰すのをしづめました。沖縄は米軍にやられているから、帰って大丈夫かと心配してくれました。

昭和二一年の夏頃、帰郷しました。最初は那覇港に着きました。沖縄に着いたら那覇港でHBTのだぶだぶしたズボンをはいた人が大勢歩いているのを見て、「あれ、イチチョーサーヤー（生きているね）、大丈夫やさ」と言つてびっくりし、うれしかったです。船は那覇では上陸できないということで、遠くインヌミヤードウイと当時いつていた所まで連れて行かれて上陸しました。そこでDDTを背中から入れられ、頭からかけられ、全身にまかれて大変でした。一晩ぐらいコンセットの家にいたと思います。

沖縄戦を生き残ったきょうだいが仲間の収容所に親戚と暮らしていることが分かり、私もそこに住まわせてもらいました。いとこの紹介ですぐに仕事も探すことができ、食糧もたくさんあり、困ることはありませんでした。

牧港を出るときからずっと一緒に行動してきた百合子さんは、戦後すぐに同郷の許婚の男性が呼びに来て一緒に九州に行つてしまったので、戦後の帰郷は別々です。

帰りの船のなかで大宜味小太郎の一座と一緒にになり、船中でも芝居などしていました。戦前は大阪の四貫島に芝居小屋があり、大宜味小太郎が演じていました。神戸に住んでいたときは、日曜日になったら朝早く起きて洗濯をすませて、大阪まで芝居を観に行くのが楽しみでした。観客は沖縄の人ばかりで、「あれ、あんたたちも来ていたネー」となつかしかったものです。

沖縄に戻った後、銀行の外交など色々な仕事をしてきました。お世話になったネジ工場の八木社長が、戦後二回ほど沖縄にも来まし

た。観光目的ではなく、工場で働く子どもたちを必要としていたようでした。現在の会長はおいにあたる源司さんという方ですが、今でもずっと年賀状が送られてくるなどの交流があります。

【二〇一二年十月三日 大城道子調査】

沖縄県浦添市

家族のようにかわいがられた神戸の職場

又吉百合子

牧港生まれ

私は旧姓名又吉文でした。幼馴染の西原文子さんも旧姓名は又吉文子でしたので、神戸に来てからは、会社からの連絡などこんがらがって不便だということで、二人のうちのどちらかが改名することになりました。ハリマネヂ工業所の鈴木さんのオヤジさんと文子さんと三人で考え、私が百合子に改名しました。確か、何か小説の主人公で好きな名前でした。鈴木のおヤジさんは、ネヂ工業所の社長の妹のスエさんのご主人でした。ここは家族みんな仕事をしていました。

家は農業で、サツマイモを植え、牛・馬・豚・山羊を飼育していました。私は五人きょうだいの二番目に二女として誕生しましたが、

実母が三七歳で亡くなり、父は一年後に再婚しました。継母との生活は表面上は穏やかでしたが、何かにつけ実母が思い出されて内心は面白くありませんでした。下には弟ばかりで家事も大変でした。それで、姉のチヨは自分の紡績に行きましたので、私も早く家を出て紡績に行きたいと思っていました。家畜も多く、一日に二回シンメーナービーに豚のエサを炊くなど、多忙だったので、相談をしても行かせないだろうというので、親には黙って行きました。

紡績でのことは、西原文子さんが話したとおりです。紡績を逃げ出したときのことを思い出すと、今でもウトウルサンと思います。会社の人はみんなよくしてくれました。沖縄人・琉球人ということで、差別するということは一切ありませんでした。むしろ「カナササツタンドー、ヤー」と大事にされ、お世話になりましたね。私たちは、十八の子どもだったからね。

あるとき、八木社長が二人に下駄を買ってくれました。沖縄では履いたことがない、きれいな鼻緒の下駄でした。うれしくて雨の日もはきましたら、すべってころんでしまい、鼻緒が切れてしまいました。でも、鈴木のおヤジさんが直してくれました。

ネズ工業所にはもう一人、沖縄出身の女性が働いていましたが、二、三か月ほどして、迎えに来ただんなさんと一緒に北海道に行くといって辞めました。その女性は牧港出身の又吉清子(旧名カナ子)で、私とは遠縁にあたります。ご夫婦は、北海道で二人の子どもを得て帰郷し、夫の又吉清さんは八・九・十代の牧港区長として頑張った方です。

私の夫になる人で、当時は許婚者だった又吉広太郎も開拓義勇団で満州に渡っていました。二四、五歳だったと思います。広太郎は大正十年十一月十五日生まれで、牧港出身です。夫と同じ頃に満州に行った人は牧港から四人ほどいたようです。昭和二〇年には、夫は大阪の造船所で働いていました。

大阪から熊本に移動して、熊本から昭和二二年に夫婦で引き揚げて来ました。私は六か月の身重で、帰郷後に牧港で双子を出産しました。当時は妊婦が心配し動揺するといけないからということだったと思うのですが、妊婦本人には双子とは知らせなかったですね。ただ、「赤ん坊のおしめや洋服は少し多めに準備しておきなさい、たくさん縫っておきなさい」と、それとなく準備をさせられました。牧港には首里の産婆さんが巡ってきていました。

戦後はダブリュ・テラーで一か年半、琉石で十年以上勤めました。琉石では三年して本採用になりました。

大分の中津に行っていた姉のチヨは、戦後夫婦でブラジルに移民しました。姑と沖縄で生んだ二人の子を連れて行き、ブラジルで三人生んでいます。最初はトマトなど作ったようですが、うまくいかなくて、街に出ることにしたようです。

姉は一九六〇年代に三〇代の働き盛りでブラジルに行きましたが、行った人は大変な苦勞をしているんですよ。ブラジル移民は最初にあたった土地が悪くて苦勞したということです。当時の又吉正雄村長がこの移民を勧めたんです。それでみんな怒ったということです。よ。「いい所とっていたのに」と言って。帰ってきたら沖縄はこん

なに発展している、沖縄がこんなになるって知らなかったといつてね。なかには行かなければよかった、自分たちはだまされたという人までいたようですよ。姉たちは最終的にはサンパウロに出てきて、落ち着いたんですよ。その姉は、六一歳のときにブラジルで亡くなりました。

第二回の世界のウチナーンチュ大会の前に、姉は沖縄に来ました。私も船で二か月近くかけてブラジルに会いに行ったことがあります。

【二〇一二年十月三日 大城道子 調査】

沖縄県浦添市

出稼ぎで転々とした父と軍需工場で働いた私

當間幸吉

沢岬生まれ

昭和三年四月二十九日

父當間加目、母カメイの九人きょうだい（六男三女）の三男として生まれました。屋号は次男仲川の前です。現在は妹二人と私だけ生きていて、六人は亡くなりました。父は貧しい農家の二男でした。祖父は酒飲みで、父が小学校三年生のときに親戚の金持ちの家に売り飛ばしたそうです。父は十八歳のときに船乗りになれることを聞

き、奉公先を逃げ出し船乗りになりました。標準語も余り知らないで馬鹿にされたのですが、一生懸命働いたので、親切な船員が文字や標準語を教えてくれたそうです。働きながら勉強して三級機関士の免許を取ったそうです。

父は二〇歳になり、兵隊検査を受けるために船乗りをやめて沢岬に帰ってきました。奉公先の借金を払い、母と結婚したときに、サイパンの南洋興発という製糖会社が大変よい条件でウチナーンチュを募集していたので、新妻を連れてサイパンに行きました。ところが、募集条件とは違ってひどい仕事で、風邪を引いて寝込んだら、すぐ解雇されたそうです。長男が生まれたときも、自分で取り上げたそうです。幸い山へ行けば木の実がいっぱいあるので何とか飢えはしのぎましたが、どのように旅費を工面したか分からないが、翌年には妻子を連れて沖縄に帰ってきて、すぐ横浜に働きに行きました。三級機関士の免許を持っていたので、高い賃金で働くことができたそうです。ある程度金が貯まったので沖縄に帰り、そこで二男幸清が生まれ、私が生まれて三か月めに家族を引き連れて神奈川県川崎市に働きに行き、横浜・東京と、いい条件の会社を転々としながら、貧しいながら暮らしていました。四男が横浜で生まれ、五男が川崎で生まれ、長女が東京で生まれました。

ある程度安定した暮らしができ、貯金も貯まったと思われた頃、父の友人が久米島に行けば畑が安く買えると話を持ちかけてきました。父は何の疑いもせずその話にのって、家族全員を連れて久米島に渡りました。有り金をはたいて借金までして買った土地が実は村

有地で、そのブローカーは逃げてしまっていました。長男は病気で十八歳で亡くなり、父はまた横浜へ働きに行き、母は帽子クマーをして現金収入を得ていました。兄の幸清は小学校六年生でしたが、他人の山羊の草刈をしてほんの僅かでしたが家計を助けていました。父は昭和十九年に家族（母と妹たち三人）を連れて満州開拓団に行つて敗戦になるまで満州にいました。逃げて帰る途中にチチハルの中学校で母は亡くなっています。父母の生涯は苦難の連続だったようです。

私は、小学校一年生は東京で、二年生は久米島で出ました。三年生から浦添小学校に通いました。その頃の沢岬では、ほとんどが農業なので、製糖期になると子どもも学校を休ませ手伝いさせていました。雨が降ると製糖の手伝いをしなくてよいので、子どもたちは喜んで学校へ行きました。傘もないので母は「学校は休みなさい」と言っていました。クバ笠をかぶって行く子もいましたが、そのクバ笠さえうちにはありませんでしたので桑の枝をかぶったり、風呂敷をかぶって走って行きました。学校まで約三〇分を走って行ったのです。

その頃、靴を履きなさいという学校からの通達がありました。しかしうちは靴を買えないので裸足で登校していました。罰として掃除当番はもちろんのこと、殴られることもありました。その先生は、どうして履いてこないのか聞かないで、履いてこないのは悪いというだけで、三日目には三人が鉄のベルで頭を殴られ血が出て包帯を巻いて帰ったものですから、その話を母にしたら、帽子クマーの賃

金をはたいて靴を買ってくれました。学校卒業するまで靴を買ったのはこれ一足です。

私は本が好きでしたので、夏休みには、首里の図書館によく行きました。沢岬から歩いて三〇分ぐらいかかりました。私は歴史の本が好きで、沖縄の歴史の本をよく読みました。

昭和十八年四月、浦添国民学校高等科を卒業して、神戸の軍需工場の川崎車両株式会社に就職しました。私が軍需工場にするか、満州義勇軍に行くか迷っているときに、父は満州には絶対行くなと言ったので、軍需工場に決めたのです。この会社は青年学校を経営していて、全国から採用された約一五〇人の養成工がいました。その青年学校で上位三人は、会社が高等専門学校へ推薦入学させ、将来会社の幹部にする制度がありました。私はこれに絶対入学すると心に決めて一生懸命勉強しました。全国から集まった同年生は約一五〇人、五〇人単位で三組ありましたが、私はそのうちの一組の学級長に推薦されるまで上位クラスに入ることができました。三年生になると試験がありますので、それに向けて更に勉強に励みました。しかし、昭和二〇年の空襲で学校も寮も焼かれ着の身着のままになって、この望みも断ち切られました。敗戦になりましたが、会社の仕事は平和産業を続けることになり安心でした。弟の幸栄が私を頼ってきて、私の会社に入れてもらったのですが、「沖縄に帰りたい」と言い出しノイローゼになってしまったので、昭和二二年に沖縄に帰ってきました。私は会社の養成工上がりで、将来会社の幹部になれる望みもありましたので、親や弟妹がどうしているか様子を見たら神

戸に戻るつもりでしたが、パスポートもとれず三年ほどで神戸行きは断念しました。

沖縄ではアメリカ軍のなかにしか仕事はないので、港湾荷役やモータープールのタイヤーメンになりました。十九歳でしたが、アメリカ軍の自動車運転免許をとり運転手として働きました。

昭和二六年に二歳年下の仲西サダ子と結婚して、二男二女の子どもに孫が八人います。妻は平成十九年に亡くなりました。私は現在独身生活を楽しんでいます。

平成十九年に満州の開拓団跡地を見に行きました。母と弟が亡くなった所を見たい思いで、満州帰りの人たちと一緒に行きました。県庁の人たちは満州は危ないから注意なさいと言っていました。向こうではむしろ大歓迎されました。日本の開拓団で働いていた人たちの子や孫たちが親からいい話を聞いていたといつて喜んで迎えてくれました。そこで不思議なことが起こりました。満州で亡くなった子どもたちを埋葬した所で線香を焚き拝んでいたら、トンボがいっぱい飛んできて私たちの上をぐるぐるまわっていました。帰りのバスに乗るまで寄ってきて見送っていました。一緒に行った女の人がそこで亡くなった娘の名前を呼びながら「追ってきなさいよ、沖縄に帰ろうな」と呼んでいたのが、深く印象に残っています。

よりよい生活を求めて、妻子を連れて各地に出稼ぎに行った父の苦労を実感しています。国のために軍需工場に働きに行った私は、貧しい生活をしないためにも、青春時代を勉強だけに打ち込んだ思いは今でも変わりません。

【二〇一〇年二月五日石川友紀調査】
沖縄県浦添市

城間出身の夫宮里弘との上海・名古屋での生活

宮里かつ子（旧姓近澤）

大正七年八月二五日

私は名古屋出身の旧姓近澤かつ子です。父が鉄道機関車の製図の仕事に従事していた関係で、学校を四回ほど転校しました。豪雪地帯だった岐阜で雪に強いレールを設計するために、岐阜県に移りましたので、岐阜県の大垣高等学校を卒業しました。名古屋城内に駐屯していた第三師団で電話交換手とタイピストの軍属募集に応募し、YMCA内のタイピスト教室で半年間タイプを習得しました。

姉の夫である黒須義治が上海武定路陸軍士官としてモールス信号を打つ通信士で、姉は昭和五年から上海に住んでいましたので、昭和十年に私も上海へ渡りました。私の職場は、中支派遣第十三軍^{のぼり}登部隊本部で、軍の寮に入りました。その職場では、一生懸命習ったタイプは必要なく、文書は鉄筆で書き謄写版で刷って作成しました。上海には海軍・陸軍でそれぞれ色々な特務機関があり、それぞれの機関で会議があるときは、通達文書を作成、印刷、製本して配布し

ます。それらは秘密文書でした。海軍の有名な児玉誉士夫さんに公文書を届けたこともありました。時々兵隊さんに頼みこんでサイドカーに乗せてもらって届けに行ったものです。

この職場には、熊本県の人や沖縄県の人が多かったです。その中には前鹿川金三さん（故人）という那覇在の弁護士さんなど夫と共通の知り合いも複数いました。

夫の宮里弘は城間の出身で、沖縄県立第一中学校を卒業、フィリピンのマニラで英国系デパートの紳士服売り場で働いていました。その頃は大学生と外地在住者は二五歳入営ということでしたので、二五歳で召集され昭和十一年一月に歩兵第四五連隊に入営、昭和十五年に階級は伍長で現地除隊し予備役に編入されました。

私たちの出会いは、私の上司で文書課長だった宮城栄進（仲西出身、昭和六二年没）さんが夫と同郷で、しかも軍隊での班長だったのということ、共通の知人として引き合わせてくれました。

上海には十万人もの地方人が住んでおり、私はすでに六回も見合いをしていました。理想とした「背が高く、大学出」の男性には出会えず、その間に二七歳になっていました。当時では晩婚で、この機会を逃すと後は「後妻さん」の話しか来ないと言われました。上司宮城の薦めもあって、昭和十九年四月、桜の花が美しく咲き誇る上海神社で挙式しました。当時私は二七歳、夫は三五歳でした。

私は、沖縄の男性との結婚に全く偏見や抵抗はありませんでした。月刊誌『令女界』を愛読していて、昭和五、六年頃の沖縄を舞台にした少女小説を読み、「きれいな所だなあ、行ってみたいなあ」と、憧

れを持っていたほどです。

夫の両親は宮里加免とウシで、三男三女の子を得ていました。夫は三男です。夫が生きているあいだは、浦添の親戚や同級生から年賀状がたくさん来ていて、その整理は私の役目でした。親戚も城間、伊祖と発展しています。

生前、夫が話していたことと夫の履歴書によると、昭和十一年一月十日に歩兵第四五連隊に入営した後、昭和十二年七月二七日には動員が下命され、八月四日、北支派遣のため門司港を出帆しています。六日には釜山に上陸、十二日には朝鮮国境を越えて十五日には中国の黄村に着いたようです。昭和十三年四月一日付で上等兵、昭和十五年二月二日歩兵伍長となり、翌二月三日には現役延期を解かれて、通城県で現地除隊となり、翌日には予備役に編入されています。

私は結婚を機に退職しました。当時上海には日本石油など日本企業の出張所など小さな事務所が多く、仕事はたくさんありました。結婚後はつまみ食いのにそれらの出張所などでアルバイトをしました。除隊後の夫は上海で油料会社の出張所に勤務し、油の原料である大豆などの買い付けをしていました。奥地に先に買い付けに行き、一週間ほどして私も呼ばれて、単身汽車で夫の許に向かい、数日とその奥地で過ごしました。それが私たちの新婚旅行でした。若い女性の一入旅も、その頃は日本の軍人さんが駅々には大勢出入りしており、治安が悪くて怖いと思うことはありませんでした。予備役だった夫が上海で再召集されたので、私は昭和二〇年三月に単身で帰国

することになりました。夫は南方には行かず、中支派遣ばかりだったので戦禍に遭わずに助かりました。夫は軍隊にいて、この戦争で日本が負けることを察していたようです。

戦後は沖縄に帰れないというので、私の故郷である名古屋に落ち着きました。結婚後上海から六〇円の給料のうち、三〇円は実家に留守宅送金し、三〇円は私のお小遣いでした。送金したお金は二万円ほどになり台湾銀行に貯金してありました。それで気兼ねなく、実家に居候しました。両親兄弟姉妹を含めた九人家族の生活は、それでも着物を米に代え食糧を得るのに苦労はしました。

帰国後私はすぐにタイピストの仕事を得ましたが、夫の仕事が見つかりません。色々な仕事を繰り返して、しまいには自宅を改造して大曾根で喫茶店「ブラック」を開業しました。お店は大繁盛し、人も雇いましたが、私もタイピストを辞めて手伝いました。開業したばかりの頃は、しっかりした県人会はまだなかったと思いますが、噂で人が訪ねて来て、その人がまた紹介するということで大繁盛しました。

夫はおしゃれで有名でした。銭湯に行くときも、英国仕込みの背広・チヨッキ・ネクタイを締め、自分の服は自分でアイロンをかける徹底ぶりでした。私がやることは気に入らなかったのですね。そういう意味では楽でした。

平成十年、夫は脳梗塞の末、心不全で亡くなりました。お葬式の十日後に、隣家の火事で類焼し、戦前の写真も書類も思い出になるものは焼けてしまいました。

晩年の夫は「いつかは故郷に帰る」が口癖でしたが、帰郷の希望を果たせずに病で亡くなりました。

私は、夫の希望をかなえるために沖縄での散骨を考えました。それは沖縄の風習にはなじまないようで、浦添の親戚は賛成ではありませんでしたが、二人の娘と共に、夫の遺灰を沖縄の青い海に散骨し、沖縄に返しました。

【二〇〇九年十一月三〇日 大城道子 調査】

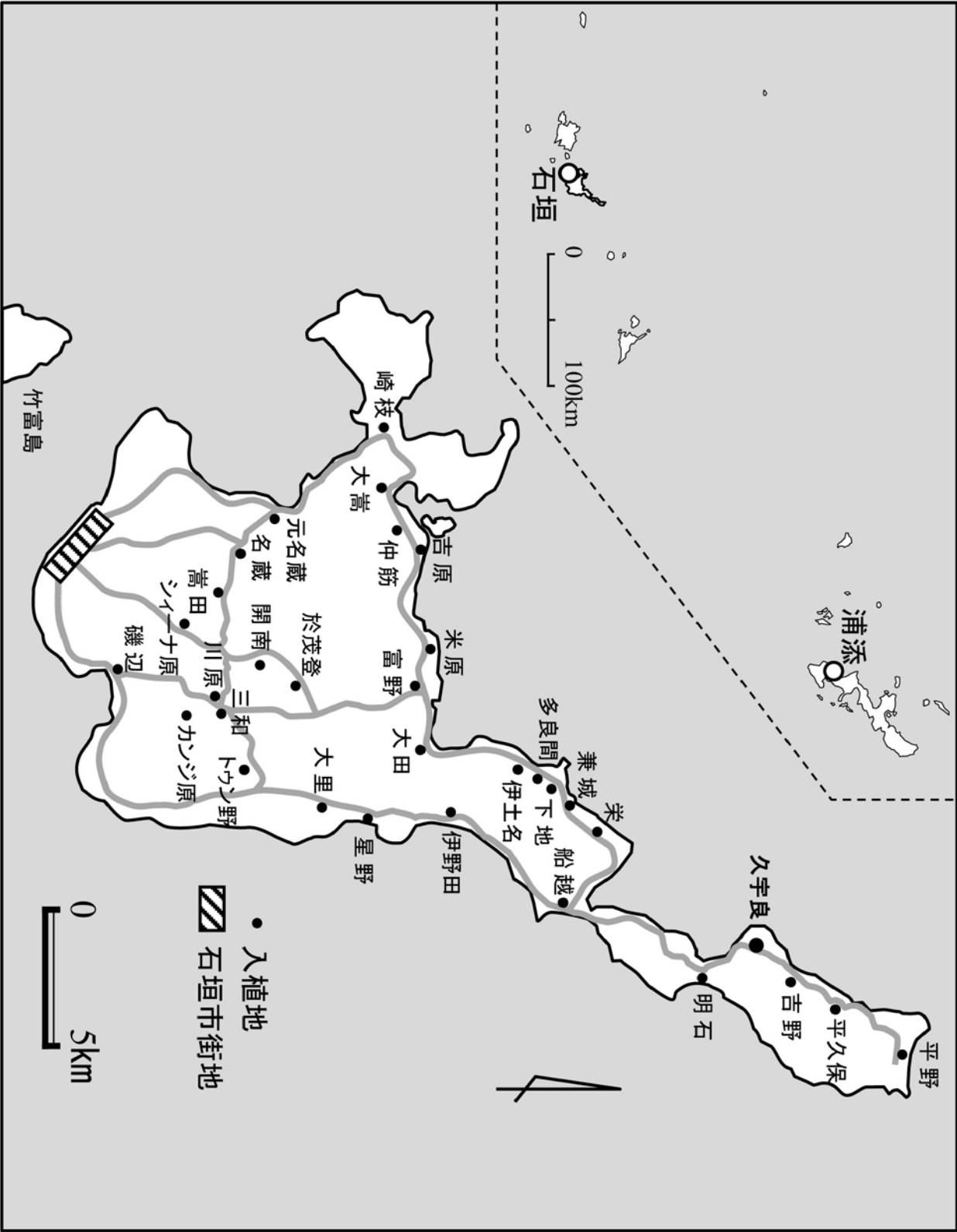
愛知県名古屋市

八
重
山

YAEYAMA

戦後、米国民政府と琉球政府によって八重山開拓移民政策が始まり、1952（昭和27）年から 1957（昭和32）年までの6年間に 729 戸4,138人が移住した。浦添からは 1956（昭和31）年に八重山開発青年隊の一員として、平久保半島の久宇良の廃村跡に入植している。しかし、開拓地によって、成功した集落もあれば、台風やマラリアなどで離脱者が出る集落もあった。

ハ
ワ
イ
・
北
米南
米ア
ジ
ア
太
平
洋国
内



久宇良開拓 開墾の日々

宮城良善

仲間生まれ

昭和九年生

家の屋号はメーヌヨナハグワー（前ヌ与那覇小）といいます。浦添からは私ひとりが開発青年隊で、久宇良へ行きました。各字の青年会に、開発青年隊の説明会をするということで県の担当課から連絡があり、希望するなら話を聞いてみてはどうか、ということ仲間部落の先輩と三人で仲西中学校で説明を受けました。土地も一丁五反、四五〇〇坪与えられるということで、「一緒に頑張つてような」ということを話しましたが、いざ行くとなった頃、他の方は八重山には行かないで、南米に行くことになりました。

説明会には二、三〇人が話を聞きに集まりました。昭和九年生まれの私が一番若かったですね。説明を聞いて、私はきょうだい七人、四男三女の二男で、ここでは四五〇〇坪もないし、年間で支払い、安く売るからということ、何日か経って申し込みに行きました。

昭和三〇年でしたか、まず訓練ということで国頭の方でダム工事や農道工事があって、八重山に行ったのは昭和三十一年です。国頭は宇嘉の道路工事を山の上の方でやりました。あのときは九月か十月から始まっていたのですが、私は連絡不十分で一か月ぐらい遅れの十一月になって行きました。

訓練ということで三か月ぐらい宇嘉の公民館にいました。そして翌年の一月に八重山に行きました。

私の前の仕事は、城間で軍作業をしていました。給料は一日一〇〇円くらいでした。軍の仕事はたくさんありました。中国人が軍相手にレストラン経営をやっているものですから、レストランとかバヤリスとかコークなど、色々な仕事がありました。仕事は結構あったけど、土地の魅力がありました。八重山移民はマラリアの心配などもあり、家族が反対することもあったといい、私の場合もいくらかは反対ではあったでしょうが、仕方がないということでした。

八重山に行ってみると、家の中はみんなマラリアの薬で消毒されて白くて、外はDDTをかけていました。実は私も先遣隊と一緒に山からの切り出しのときにマラリアにかかってしまい、キールという薬を飲みました。

八重山へは泊港から出航しました。八重山行きは南州丸とみどり丸というのがありましたが、私は南州丸に乗りました。八重山へは夕方出航して二四時間かかりました。ここから夕方出たら、朝は宮古に着いて、それから荷物を降ろしたり載せたりして、八重山には大体、夕方の五時に着きましたが日にちは覚えていません。あの頃の石垣港の港接岸ははしけで、沖に停まって船を近づけて甲板から甲板に移って、その船で港に向かいました。

迎えはなくて、その日は開発会館という所に泊まりました。部屋は大部屋で、台所もあって炊き出しする方がいました。トラックに

乗って伊野田から伊原間まで行って、久宇良へ向かいました。

最初の政府の話ではブルドーザーを使って開墾することだったのですが、ブルドーザーなどはなく、シャベルで開墾しました。それから牛が二頭で、鋤とかです。耕運機ありませんでした。鋤は自分で買ってきて、ショベルは備品としてありました。あとは鎌とスコップだけでしたね。牧場の跡を開墾するという話ぐらしか聞いていなかったと思います。土地は柔らかくて黒マージでした。荷物は開発丸という木造船からみんな運びました。

久宇良の宿舎は今の公民館の隣で、建坪は大体二四坪ぐらいだったと思います。個人の部屋はなくてみんなでごろ寝しました。寝具は持参でした。食事は当番制で作りました。開墾で使った牛は久宇良にはいなかったの、石垣四箇あたりからお金を出して借りていたと思います。

開墾中の生活は、七時ぐらいに起きて夜は十時頃には寝ていました。朝食が済んだらすぐ畑へ行って、開墾して、お昼に戻って食事をして、また畑へ行って五時ぐらいまで作業をしていました。それから宮城清春さん、石垣イシンさんという指導員がいて、夜は野菜作り、カボチャ作りとかのいろんな野菜作りの学習会がありました。

開墾してまず植えたのは紅芋でした。野底部落から芋づるをもらって芋を植えました。後から来る人のために先に芋を作っていたのです。最初は芋を植えて、次は落花生、陸稲を作りました。陸稲の苗は明石部落とか野底部落から買ってきました。後でサトウキビ・パイン・葉たばこを作っていました。私は葉たばこは作りませんでした。

のちに主に作っていたのはサトウキビでした。NCOという品種です。あの頃パインはもう下火でしたが、パイン会社が七つあって、みんな好きなどと契約していました。私はオキカンという会社でした。開墾が遅れている方の畑は、PTA作業のようにみんなで加勢をしていました。

先遣隊が来たら、開墾ではなく、山へ家を造るための木を切りに行きました。他の部落は茅葺きでしたが、たくさんのカラ（瓦）が必要だからということで、石垣にカラ屋（瓦工場）があったので、久宇良部落はセメンカラ（セメント瓦）の家を造りました。

開拓団は三班に分かれていました。私のいた一班は国頭辺りのヤンバルンチュ、二班は北谷、中頭辺りで三班は南部辺りの出身でした。どの班にも大工がいましたね。一班は村の真ん中、二班は前の方、公民館の下の方は三班と配置されていました。公民館の近くに共同売店があつて、日用品雑貨はほとんどありましたね。

水は部落の前の井戸と、近くの川を利用しました。川の水で洗濯をしたりしましたが、地震があつて、その後流れる水が止まってしまいました。野底から井戸掘りと呼んで公民館の後ろの方に掘ったのですが、水は出ませんでした。それからは部落の前の井戸を使っていました。

家畜は牛を飼っていました。農耕のときには、馬も使いましたが、機械化されてからは牛と山羊を飼いました。屋敷は一五〇坪以上で、屋敷囲いの木はフクギでした。隣との道幅は一メートル八〇センチから二メートル五〇センチぐらいあって、馬車も通れるくらいの大

きさでした。

浦添からは自由移民で、勢理客の比嘉さんが磯辺部落へ、小湾部落の方は安良部落の安良牧場にいました。安波茶部落から行った方は確か西原さんといって大田部落にいました。

比嘉さんももう沖縄に引き揚げました。小湾から安良へ行かれた方も引き揚げたと思います。西原さんは亡くなられたと聞いています。

久宇良には十七年いました。妻は明石部落の出身で、子どもが四人います。長女が本島的那覇商業高校に行くことになり、本島のきょうだいの家にいましたが、二女も本島の高校へ行きたいということになって、昭和四七年の八月に沖縄に引き揚げました。

【二〇一一年四月十一日 崎原恒新 調査】

沖縄県浦添市

